

情報モラル

みやぎ情報活用レポート

教材のねらい

情報モラル教育について、「大切なことは分かっているけど、何をどのように実施してよいか分からない」という声をよく聞きます。また、「自分はSNSに詳しくないから」という理由で、外部講師を招き、体育館で講演を行うというケースも多く見られます。

しかし、講演形式で、「こんなトラブルに気をつけてくださいね」とトラブル事例の紹介や注意喚起を行っても、子供たちは「トラブルがあるのは分かるけど、そんなの自分には関係ないし」と感じてしまい、当事者としての自覚を持ちにくいという課題があります。

例えば、ネットでの炎上事件を紹介し、「不適切な写真をアップしないようにしましょう」と指導しても、子供たちは「はい、不適切な写真はアップしません」と答えるでしょう。ここでの問題は、「不適切な写真」とは何か、指導者と子供たちの間でズレていることにあります。同様に、「夜遅くまで使いすぎないようにしよう」、「SNSで悪口を言ったり、嫌なことをしないようにしましょう」と指導しても、「夜遅く」、「使いすぎ」、「悪口」、「嫌なこと」、などは曖昧な言葉であり、大人と子供、または子供同士でも認識に「ズレ」が起きやすくなります。自分は使いすぎていないつもり、自分は悪口を言っていないつもり、というズレがあるからこそトラブルが起りやすくなるのです。

こうした課題を踏まえて、私の研究室では、LINE株式会社と共同研究を行い、「トラブル事例を伝える」という情報モラル教育ではなく、子供たちに「もしかしたら、私もトラブルを起こしちゃうかも…」という「当事者としての自覚」を促すことを目的とした教材の開発を行っています。

本ワークシートは、こうした共同研究の成果を踏まえ、カード分類比較法による自覚を促す指導方法を取り入れ、先生方が教室で活用いただきやすいように工夫いたしました。どうしたら子供たちに問題を自分のこととして自覚させられるかという視点で、「考え、議論する情報モラル」を目指していただければと思います。

アドバイザー

静岡大学准教授 塩田真吾

略歴

LINE株式会社との情報モラルの教材の制作及び普及活動の他、テレビ番組や全国各地での講演等で“自ら考える”啓発教育を行うことを目的にした情報モラル教育の実践を推進。本教材では、情報モラル教育を担当。